

長江の「ゴールドタウン」

三峡ダム建設工事は、小さな河辺の町を変ぼうさせた。
にわかになされた飲屋街のほの暗い明かりの下で
長江の「蜜の味」に惹かれた男が静かに酒杯をかたむけていた。



全国から集まった建設労働者たち



長江のせき止め工事の現場

宜昌から西へ車で1時間余り、三峡ダムのせき止め場所に近い三斗坪という街にしばらく滞在した。もともと何の変哲もない地方都市の風情だったが、ダム工事が始まってからというもの、街の様相はガラリと変化したようだ。何しろ、三峡ダム建設に費やされるカネは天文学的である。蜜の味を求めて、出稼ぎ労働者や中小の土建屋やら怪しい手配師の類やら、善人も悪人も大挙してやってきたものだから、開拓者時代のアメリカ西部のような混沌とした熱気とやさぐれた雰囲気も漂うのも無理からぬことである。

街は工事関係者の居住区と旧市街地とはっきりと分かれており、検問所を通らねば往き来できない、新しく開発された人工的な街と古ぼけて雑然とした

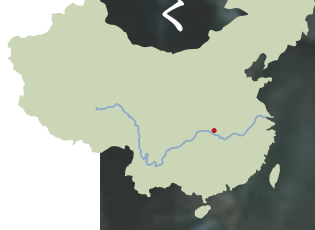
野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるリポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」料と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。



10 宜昌
長江
を行く

の数は2万人を
超えたらしい



のチップを手にできる。ただこのような仕事の経験はないらしく、彼女は「リリ」ともせず、黙って座っているだけである。十畳くらいの広さのホールにも私たちのほかに客の姿は見えない。歌声のない伴奏だけがさびしく流れていた。

私は劉さん、まあ、一曲歌を聞かせてください」と水を向けたものの、彼もちよと微笑むだけでマイクを握る気配はない。私はといえば日本語の歌を見つければ、手持ち無沙汰である。ガランとした部屋に点滅する赤や黄色の豆電球の光がいつそうわびしい。

私たちはビールを2本あげ、それでも1時間ほど粘った後、押し黙ったまま店を出た。帰り道、劉さんは長江にかかる橋をとぼとぼと歩いてきた。月の光に照らされた劉さんの後ろ姿だけが妙に心に残った夜だった。

田舎町とそのコントラストはいかにも奇妙である。検問所をはさんで風景が一変するものだから、慣れるのに多少の時間もかかる。

私は数日間、昼間は工事現場、夜は旧市街の繁華街に足を運んだ。どちらも面白い。労働者たちはハルピン、西安、広州など全国から集まっています。食堂などでは、各地のお国なまりの中国語が飛び交っている。ダム建設の現場を渡り歩いているベテランもいれば、将来への希望を持ってない田舎の暮らしに見切りをつけ、着の身着のままやってきた若者もいた。彼らに共通しているのは、「ここに

来れば仕事の口があり、ちよとした力ネ儲けもできるかもしれない」という期待感だ。ただやはり目端の利き加減によって随分と羽振りも違う。威勢のいいのはたがい手配師である。ハルピンから来た高さんは下請け企業へ労働者たちを斡旋して、しこたま稼いでいるらしい。いきつけの食堂でいつも仲間たちと飲み食いしていた。

一方、四川省の農村から出てきた劉さんはちよと意気があがらない。「こちらに来て半年。1日も休みなく働き詰めで。それでも稼ぎは1カ月700元、約9000円です。すかね。食費や宿泊代を払ったら、ほとんど残りません」と小さくため息をついた。

工事の最盛期にはこんな労働者たち

「私の郷里にもカラオケやダンスホールがあります。田舎ではそんなところで遊ぶ奴は冷たい眼で見られますけど、男だからねえ、まあ、仕様がなくてよ。まあ、男なんだから……」

接待してくれたのは、宜昌生まれの若い女性である。客ひとりにつき10元ほどの

接



労働者たちが集う夜の街